

プレスリリース

- ◎スズメバチ被害防止パンフレットを発行 ―刺傷事故の軽減に効果を期待―
- ◎本州のブナ一斉結実状況をデータベースで公開 ―森林や野生生物の保全管理に有用―

◎スズメバチ被害防止パンフレットを発行 ―刺傷事故の軽減に効果を期待―
(平成18年7月26日にプレスリリースを行いました。)

スズメバチは日本で最も危険な昆虫のひとつで、刺傷事故による死亡者数は全国で年間30～70人ほどになります。ハイキングや森林浴などで森林を散策する機会が多くなっていますが、森林はスズメバチにとっても絶好の生息場所です。そのため、スズメバチと出会うことも頻繁になるため、毎年多くの刺傷事故が発生しています。

森林総合研究所では、スズメバチの刺傷事故を軽減することを目的として、スズメバチの季節消長や地域による種類の違い、攻撃性と色との関係、巣の密度調査などの研究を行ってきました。今回作成したパンフレットは、いままでの知見に私たちの研究成果を交え、わかりやすく解説したものです。ハイキングや森林浴などで森林を訪れる方を対象に、スズメバチの生態とともに、危険な時期、危険な衣服の色、そしてもしスズメバチに出会ったときや、刺されたときの対処の仕方が平易に書かれています。また、巻末には主なスズメバチの写真と解説、生活史の概略も付してあります。

これから森林を訪れる機会が多くなります。このパンフレットを読んでもいただくことで、スズメバチのことをよく知っていただき、刺傷事故が減少することを願っております。



※パンフレットはホームページからダウンロードできます
(PDF: 491KB)

◎本州のブナ一斉結実状況をデータベースで公開 ―森林や野生生物の保全管理に有用―
(平成18年7月28日にプレスリリースを行いました。)

ブナ林では数年に一度、かなり広い範囲でブナが一斉に結実する性質をもっています。この現象はブナ林の世代交代や、そこに生息してブナの実を餌にするツキノワグマやネズミ類などの野生生物の繁殖や行動に影響することが知られています。

ブナ苗を生産するための種子は、ブナの一斉結実のときに確保が容易です。また、ブナの豊作の翌年にブナが凶作になるとツキノワグマが人里に出没しやすいことが知られています。このようにブナの一斉結実の情報は、森林や野生生物の保全管理にきわめて有用と考えられます。しかし、ブナの一斉結実が実際にどのような範囲で起こるのか、全国的に調査されたことはありませんでした。

そこで、森林総合研究所は1989年から本州でブナの実の結実調査を行い、その結果をデータベース化して森林総合研究所のウェブサイト公開することにいたしました。

(URL: <http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/tanedas/index.html>)

東北地方においては東北森林管理局の協力のもと1989年から、そして関東・中部・近畿・中国においては林野庁の協力を得て2005年から行われています。

なお、本調査およびデータベースの作成は、森林総合研究所の研究プロジェクト「ツキノワグマの出没メカニズム解明」の一環として行いました。

2005年の結実パターン

2005年は東北地方から北陸地方まで広く日本海側でブナが一斉に結実して、いわゆる豊作となりました。一方、福島県から愛知県に至る太平洋側のブナ林、および中国地方の西部では、ブナが豊作となった地域はほとんどみられませんでした(図)。

今後の展望と研究成果の応用例

近年、ブナの結実状況は県など地方自治体のレベルで調べられています。例えば岩手県では、昨年ブナが一斉に結実して豊作となり、逆に今年は凶作と予想されたことから、3月20日に「ツキノワグマの出没に関する注意報」が発令されました。しかし、ブナの一斉結実現象もクマの移動も広範囲で起こるものなので、各地方自治体のデータだけでは不十分です。今回のデータは、そういった限界を補うものです。また、ブナの一斉結実現象は学術的にも興味深いものであり、その原因解明などの研究をより進める上での活用が期待されます。

調査方法

各地方の森林事務所管内においてブナ林からなる林班*を選び(2005年は約430地点)、ブナの結実状況を目視で確認して、豊作・並作・凶作・無作の4段階で評価しました。この目視調査は、ブナの結実状況を正確に指標していることがわかっており、母樹直下での1m²あたりのブナ種子落下数は、豊作時に200～800個、並作時に50～200個、凶作時に50個未満となっています。

用語の解説

林班

森林管理の便のために設定された森林の区画。林班の境界は、河川・沢・尾根などの自然地形を利用することが多い。

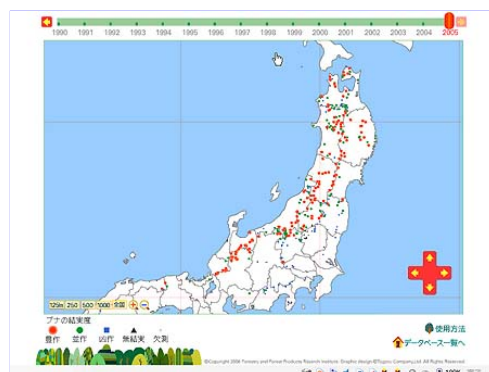


図 2005年のブナの豊凶分布